# 鍵

前川美和

「今週も終わった」
圭子は温かい日差しの差し込む廊下を職員室に向かう。ホッと自分の席に着いた目線の先に、またあの体育教師がいた。
「スーパーで働くよりよっぽど時給のいいバイトだろう？」
と言ってくる。彼は圭子のことをパート先生と呼び、嫌味をぶつけてくるので、圭子はあいまいに笑って、目をそらす。
彼女は去年の四月から、この泉南の高校で非常勤講師として英語を教えている。市役所に勤める夫との間に一人娘がいる。二人目がすぐ欲しかったのだが、思うように授からなかったので、娘が三歳になったのを機に社会復帰しようと思った。教師の経験はなかっが、使える資格が教員免許しかなかったので、一月に登録して非常勤の口を待った。幸い三月中に声がかかり、自転車で通えるこの高校で週三日働くようになった。
採用された当初、経験のない三十過ぎの女が雇われたことに対して、強いコネがあるんだろうと教師間で噂されていることを、後で同僚から聞かされた。教師の世界も俗っぽく排他的な集団であることが徐々に分かってきた。一年余り経って、教えることには慣れてきたが，職員室の空気にはなかなか馴染めなった。
隣に座っているアメリカ人のデイブが英語で話しかけてくる。
「授業、どうでしたか」
「まあまあね。デイブは？」
「うーん、生徒たちは口を開こうとしません」
「話すように持っていくのは難しいですか」
「そうです。圭子はもう帰りますか？」
「ええ。また月曜日ね」
「バイ、バイ」
眼鏡の奥の青い目が優しく微笑んだ」

デイブは今年の四月からここで働いている英会話の先生だ。この学校に去年、国際学科ができると同時にネイティブの先生が来ることになった。前任のキャシーは金髪のきれいな人で、来日したばかりの頃は、もの珍しさも手伝って、あちらこちらでキャシーを囲んで、下手な英語が飛び交っていたが、そのうち潮が引くように誰も彼女に寄り付かなくなった。ティームティーチングをするパートナーの日本人教師とトラブルもあったようで、職員室で一人手紙を書いている光景がよく見られた。圭子が立場上キャシーと授業に入る機会がなかったので、遠慮して時々声をかけることしかできなかった。その反省もあって、デイブにはもっと積極的に関わろうと思っている。彼が圭子をパートのおばさんじゃなく、一人の教師として接してくれる存在であることもうれしかったのだ。
圭子は学校を一歩出ると、母親の顔になる。スーパーに寄って家に帰ると、夕食の下準備をし、四時には保育園に娘のゆかを歩いて迎えに行く。自動車で行けば速いのだが、なるべく歩かせたいし、ゆかの手の温もりを感じながら、ゆったりと流れる時間は大切なひとときだ。二人で歩いていると、季節の変化を肌で感じられる。冬の間枯れ草で一面薄茶

色だった空き地に、今は青々とした草が茂っている。
「あっ、てんとう虫だ！」
ゆかが指差す方を見ると、赤茶色の七星てんとうが葉にとまっていた。注意して辺りを見ると、葉先のところどころにてんとう虫がいる。
「あっ、てんとう虫の幼虫もいる。てんとう虫の子どもよ」
圭子はゆかに教えた。
「おかあさん、ここにもいるよ。見て！」
ゆかは幼虫を見つけては報告する。幼虫には灰色っぽいのやオレンジ色のがいる。じっとしているとサナギもたくさん見つけた。
「てんとう虫の季節だね」
と圭子は歌うように言った。
夫の透は毎日六時半頃には帰宅する。市役所でも課によっては残業や出勤を強いられるところもあるようだが、彼は基本的には定時に帰れるので助かっている。
「ただいま！」
と透がドアを開けると、」ゆかは玄関を飛んで行く。お父さんが大好きなのだ。
「今日保育園で何したの？」
「さきちゃんとごう君とブロックしたの」
「何、作ったの？」
「えーとね、飛行機。ゆかちゃんのが一番大きくてかっこいいの」
「すごいね。お父さんにも作ってくれる？」
「いいよ」
「ブロックはごはんのあとでね。」
圭子が晩御飯の準備を始めると、ゆかは
「はあい。お父さん、あとで作ってあげる」
と言い、お箸や茶碗を運んでくれる。
「いただきます」
初めのうちは自分用のいすに座って、おとなしく食べていたが、しばらくすると、いすを離れてウロウロし、透のひざに乗った。
「ゆか、もう三歳なんだから、いすに座って自分でしっかり食べなさい」
と圭子が叱っても、
「だって、ゆかちゃん、お父さんがいいもん」
と透のひざから降りようとしない。
「ゆか、赤ちゃんみたいでおかしいよ」
圭子は食事や排泄、着替えなど身の回りのことは時間がかかっても、ゆか自身にさせていきたいと思っている。しかし、
「まあ、いいじゃないか、小さい子はじっとしていないものだよ」
と透はゆかにとても甘い。ゆかはその場の空気を読んで、父親の顔を見てニッコリし、母親に対して上目遣いに勝利宣言する。女の子というものは生まれつき女なんだと圭子はつくづく実感する。
「躾は夫婦で協力して方針を決めて、ぶれないようにしないとだめなのよ」

と言っても、透は「はい、はい」と言うばかりなので、圭子はイラッとする。
ゆかを寝かしつけたあと、夫婦は各々自分の時間を持つ。圭子は最近ＴＯＥＩＣの問題を解いたり、英字新聞を読んでいる。学校にネイティブの先生がいて、なにかと英語を使う機会が増え、英語の力をブラッシュアップしたいと思うようになった。拙い英語では表面的なことしか話せないからだ。
一方、透は寝転がってテレビを見ている。
彼が本を読んだり、書き物をしたりする姿を見たことがないと圭子は思う。真面目な夫で優しい父親ではあるが、何かもの足りなさを感じてしまう。

ある日の午後、圭子は授業が終わったので、帰ろうと自転車置き場に来た。自転車の鍵を取り出そうとして、鍵がないことに気づいた。いつも入れてあるカバンの内ポケットに見当たらない。服のポケットもカバンの中も捜したが見つからないので自分の通った動線を思い出してキョロキョロしていると、
「どうかしましたか」
とデイブの声がした。
「自転車の鍵がないの。どっかに落としたのかなって」
「そうですか。わたしも捜します」
二人は自転車置き場から職員室までの道筋をたどりはじめた。
「あっ、あれじゃないですか」
デイブの示す方を見ると、溝のフタの端にムーミンの人形のついた鍵がひっかかっていた。
「それ、それ。溝に落ちなくてよかった。食堂で財布を出したときに落としたのかな。ありがとう。」
「もう帰りますか」
「授業、終わったからね。デイブは？」
「私も帰ります。あの、お茶でも飲みませんか」
「そうね。お礼もしなくちゃね」
圭子は自転車を押して、デイブと話しながら校門を出た。出会う生徒や教師の好奇の目を痛いほど感じた。
学校の近くの喫茶店に入り
「日本の生活に慣れましたか」
とお決まりの質問をした。
「だいたい。でも市の集まりに出なければならないときは困ります。皆日本語で話すから、何も分かりません。私はいるだけの壁の花です」
「市がスポンサーだから仕方ないとこあるけど、辛いわね。誰か話しかけてくれないの」
「一緒にご飯食べるとき、お箸の使い方上手ですねって、そればかり・・・」
「学校はどう？」
「ティームティーチングをしている田川先生は変です。彼女はわたしがじゃまみたいです。一緒にクラスに入りたくないようです」
「どうしてかな、田川先生はティームティーチングの経験もある優秀な先生らしいよ」

「分かりません」
「この学校はまだネイティブの先生をうまく使えていないみたいね。せっかくアメリカ人の先生がずっといるのにもったいないわ」
「そうです。たくさん給料もらっている私を使わないともったいないですね。でも遊びに来てと言われて行ったら英会話のクラスだったときは、ちょっと不愉快でした」
「そう。わたしたちは自分の英語力アップのため、デイブを無意識に利用しているのかもね」
「この学校の先生たちが授業の合間に話しかけてくるのは全然問題ないけど、電車の中で突然話しかけてくる人、いますよ。こっちが元気なときはいいんですけどね」
二人は学校や生徒や授業についていろいろ話した。帰り際、圭子は週末彼を夕食に招いた。

土曜の夕方、デイブはワインとおもちゃを片手に圭子の家にやってきた。ゆかは初めて見る背の高い外国人におっかなびっくりで、圭子のかげに隠れるように観察していたが、次第に慣れてきて、一緒にピアノを弾いたり、もらったおもちゃで遊んだりしてうれしそうにしている。透は二言三言英語で話しかけたが、後が続かないし、ゆかも今日ばかりはデイブから離れようとしないので、少々疎外感を味わいながら、圭子とデイブのやりとりを眺めるしかなかった。
デイブはよく食べ、よくしゃべった。
九時を回ったので、圭子がデイブを車で送ることになったとき、ゆかも行くときなかったので、一緒に車に乗せて行った。
帰りの車で眠ってしまったゆかを抱きかかえ、居間に入ると、透はもうそこにはいなかった。

その日以来、二人は急速に親しくなり、デイブが圭子に英語を教え、圭子がデイブに日本語を教える時間を作った。圭子の英語の勉強へのモチベーションも高まり、時間を見つけて勉強を続け、その成果を確かめに、英語のテストを受けに行った。
試験を終え、昼過ぎに帰宅すると、ゆかと透はテレビの前にいた。アニメを見ながらスナック菓子を食べている。
「いいお天気なのに、テレビ、見てるの？」
「ゆかちゃん、このテレビ大好き！」
「あなた、どのくらい見せてるの？」
「えーと、昼ごはん食べてからだから、一時間半くらいかな」
「テレビは三十分って決めてるのに」
「いいじゃないか。ゆかも喜んでるし」
「お弁当作ってあったでしょ？いい天気だからピクニックにでも行ったらいいかなと思って・・・。外で食べるとおいしいでしょう？」
「気が付かなかったよ」
「あなたって、ホントに動かない人ね」
「自分は好きなことして、ゆかの世話を押し付けて、よく言うよ」

「ゆかと二人で過ごすことがあなたには迷惑だったの？」
「いつも君は自分の思い込みをぼくに察しろって言うけど、みんなが君と同じ思考回路を持ってるわけじゃないよ」
「そうね。あなたとは価値観が違うわ」
　そのとき、ゆかが大きな声で言った・
「二人ともけんかしないで、仲良くしてね」
その一言で二人は理性を取り戻し、
「ごめん、ごめん。けんかはダメよね」
とビデオを消して、圭子の買ってきた特大のシュークリームを三人でほおばった。

　七月に入ると、期末テスト期間となる。圭子はテストの問題作製と採点、成績付けは任されているが、その期間は授業がなくなるので、学校に行かなくてもいい日もできる。デイブもひまになったので、彼の好きなウッディ・アレンの最新作を見に出かけた。
　映画が終わると昼を過ぎていた。デイブがパスタを作ってくれるというので、スーパーで材料を買って、彼のアパートに行った。初めて入った部屋は家具があまり置かれていないせいか、広く感じられた。居間もかねている十畳ほどの台所には小さなテーブルと椅子が二脚あった。ベランダ側には大きな窓があって、部屋の片隅に観葉植物の鉢が三個、所在無げに互いに向き合っていた。
「このアパートの部屋代も市が払ってくれています。わたしは日本でお金をたくさんためることができます」
　デイブが作ってくれたすっぱいトマトソースのスパゲッティーを食べつつ、圭子が尋ねた。
「お金ためて、どうするの？」
「アメリカに帰って、大学院に進みたいです。わたしは大学で英文学を学びました。おもしろかったけど、仕事が見つかりません。ビジネスの修士を得て、日本に支店のある企業に入り、日米の架け橋になりたいのです」
「架け橋か。今の生活は生かせるの？」
「わたしは二年間日本にいるから、日本人の友達がだくさんできて、日本人の習慣や考え方も少しわかるようになります。アメリカ人が日本人とビジネスするとき、日本人を理解しておいたほうが、トラブルも少なく、いいパートナーになれると思いませんか。コンサルタントのようなことがしたいのです」
「そうなの」
「夏休みに国に帰って、情報をいっぱい集めてから、じっくり比較して大学院を決めて来ようと思います。」
「将来がかかってるんですものね。しっかりと選ばないといけないね」
「それで、二週間留守にする間、悪いんですけど、観葉植物に水をやりに来てくれませんか？合鍵を渡しておきますから」
「わかったわ」
　デイブからアパートの鍵を預かった圭子はいつでも彼の部屋に入れるという恋人同士のような信頼関係を手にして、自然に笑みが広がった。デイブと別れてからもポケットの中

の鍵を何度も握った。

いつものように保育園に行くと、ゆかが開口一番
「お母さん、うれしそう」と言った。
「ちょっとね。いいことあったの」
「よかったね。ゆかちゃんもいいことあったよ。かっちゃんと遊んだの」
「かっちゃんのこと好きなの？」
「うん、大好き！」
「へえ、どんな子？」
「いっつも先生に怒られてるの」
「えっ？そんな子好きなの？」
「だって、かっちゃんかわいそうでしょ」
「ゆかはかわいそうな子が好きなんだ」
「そうよ。お母さんは？」
「お母さんはやっぱり強い子がいいな。お母さんを守ってくれるような子」
圭子は、心が強くて夢があって。それに向かって努力している人が好きだなと呟いた。

その夜、圭子は透に尋ねてみた。
「あなたの夢って何？」
「夢？夢って実現不可能なものだろ？夢なんてないな」
「じゃ、生きがいは？」
「生きがいも幻みたいなもんだけど、しいて言うなら、家族が人並みの生活ができるように働くことが僕の生きがいかな？」
「仕事は楽しい？」
「仕事は趣味じゃないよ。君のバイトとは違うんだ」
「わたしだって仕事に対して責任を持ってるわ。分かりすやくて、しっかり頭に入り、しかも、生徒のやる気が出るような授業をしようといつも工夫してるわ」
「それはそうだろうけど、君は一ケ月どれくらい稼いでる？それを何に使ってる？ほとんど君の小遣いに消えてるだろ？」
「そんなふうに思ってたの？そりゃ、私は時給講師だから、多い月でも八万足らずよ。その中から一万円は自分のために使って三万円は貯金してる。残りは何となく生活費になってるのよ」
「ぼくは君が自分で稼いだお金を使うのが悪いと言ってるんじゃないよ。ぼくの仕事は家族の生活を支えるもので、君のバイトとは性格が違うということだよ。もちろん家族ために働くことをぼくは不満と思ってないよ」
「あなたがわたしたちのために一生懸命働いてくれいるのは事実だし、感謝しているわ。ただ、私が気になるのは、あなたの自分の時間の使い方よ。時間があっても何もしないでしょ。わたし、結婚してから、あなたが文庫本を読んでるのさえ見たことないわ。何か自分を高めようと思わないの？」
「まあ君は勉強しるみたいだけど、君にとっては勉強も趣味の一つだろう？勉強して何に

なるんだい？大学教授にでもなるつもりなのか」
「バカにしてるの？」
「現状に満足しようと思わないのか。何をそんなに欲しがってるのかぼくには全く理解できないよ」
「夢のない人とは話してもむだよ」
「デイブとなら話せるのか。あんまり調子に乗ってると、みっともないよ」
　圭子はデイブのことに触れられて、自分の気持ちが見透かされているようで口を閉ざした。夫のいうことが正論と分かるだけに、悔しくて涙が止まらなかった。

　夏休み中、圭子は二日おきに、デイブのアパートの観葉植物に水をやりに行った。だだっ広い部屋の片隅に置かれた鉢に水を注ぐ。しっかり世話をすることが彼への誠意につながると信じる心の中に、人目を気にしながら、彼のアパートの鍵を開けている姿がひどくこっけいなものに感じる自分もいた。

　八月は保育園もお盆を挟んで、一週間ほど夏休みになるので、圭子はゆかとゆっくり過ごせた。涼しいうちに買物を済ませ、昼御飯は二人でお好み焼きを焼いたり、サンドイッチを作ったりして食べた。ゆかには卵を割ったり、パンにバターを塗ったり、できそうなことをは何でもさせた。食の細い子だが、自分で作ったものは張り切って食べた。お昼寝の後は水浴びをしたり、公園で遊んだりして柔らかい時間が過ぎていく。透も休みの週末は三人でキャンプに行こうと提案したが、透は尻込みした。
「キャンプ？テントを張ったり、飯ごう炊飯したり面倒じゃないか。それよりどっか近場の温泉、ネットで探して予約しておいてよ」
「野外でいつもと違った体験するのが楽しいのに・・・。アウトドア、ダメなんだ」
　結局、圭子がネットで調べて、たまたま空室のあった少し値の張る温泉旅館を予約した。宿ではしゃぐゆかと透を眺めながら、夫は口では偉そうなことを言うけれど、すべて人にお膳立てしてもらわないと動かない人なんだということを再認識した。親子三人、幸せだと思いつつも、夫の横顔に冷たい視線を送っている自分に気づき、ドキッとした。

　夏休みも終わる頃、デイブが帰ってきた。ゆかには小石チョコ、圭子にはペーパーバックの英英辞書を買ってきてくれた。
「久しぶりに友達に会ったら、おまえの英語はおかしいと言われました。日本人相手にゆっくりしゃべることに慣れてしまったんです」
「へえ。そんなことあるの？」
「長く日本に住んでいる人の英語はネイティブのとは違いますよ」
　デイブは友達と楽しい休暇を過ごす一方で自分の進む大学院も決めてきていた。希望する大学院に入るには、秋に神戸で行われるテストでいい点を取らなければならないと言う。
「十月のテストに向けて一生懸命勉強しなければなりません。点数次第で大学院が決まるのです。・・・テストの前日に一緒に神戸へ行ってくれませんか。神戸はよく知らないから不安なんです。会場も確かめたいし・・・」
　圭子も神戸に詳しいわけではないが、地元を離れ、人目を気にせず。デイブと過ごせる

と思うと心がざわついた。
「いいですよ」
と返事すると、彼はホッとしたようにうなずいた。

当日はゆかの延長保育を頼んで、駅で待ち合わせた。ホームから見える空は抜けるように青く、容赦のない光がすでに一面に降り注いでいた。
ポートアイランドにある試験会場の下見に行く前に、神戸の街を楽しもうと電車の中でガイドブックを開いた。洋館巡りはしたことがあると言うので、三宮辺りのおもしろそうなスポットを探した。デイブが昼はガイドブックにあるスペイン料理店で食べたいと言ったので、ガラス細工やユニークなデザインの文房具店など数件立ち寄った後、そのレストランに入った。おおざっぱな地図を頼りに地味なたたずまいの店にたどりついたときには、おなかはペコペコになっていた。火傷しそうな本場のパエリヤを食べ、昼間だというのにテキーラを注文し、顔を真っ赤にして、いろいろ語り合った。

デイブは家族や学生時代のことなどよくしゃべった。彼の両親は中学生の頃離婚したそうだ。離婚の理由までは言わなかったが、父親を語るときの彼の厳しい表情や言葉の端々に父親に対する怒りが垣間見えた。
「わたしは絶対いい家族を築きたいです。夫婦がお互いいたわり合い、協力して子供を育てたいです。子どもに寂しい思いはさせたくないです」
「そうね」
「今は大学院に入れるようがんばらないとね」
「わたしは英語の力をもっとつけて、教え方も勉強しないといけないな」
「圭子は自分に負荷をかけすぎていませんか。圭子の英語は上手だし，仕事も子育てもがんばっています。今のままで十分だと思います。圭子を見ていると自分を見ているような気がします。一日何もせずにいると、罪悪感にさいなまれます。怠惰な自分が許せない感じ、圭子も分かるでしょう？」
「とっても分かるわ」
「何かしなければという強迫観念ですね。それに、わたしは早く国に帰って、大学院を出て仕事に就かなければならないという焦りを感じます。今の生活は本当の人生を始める前の段階にすぎないと思ってしまうのです。そんな時、『ライフ　イズ　ライク　ア　トレイン　ライド』という言葉を思い出します。電車に乗っている人は、駅に着いたら仕事に行こうとか、家に帰ろうとか思って、ひたすら駅に着くのを待っている。でも人は電車に乗っているようなもので、決して駅には着かない。待っているうちに終わってしまう。本当の人生は電車に乗っている今なんだ、という意味です。いい話でしょう？」
「ライフ　イズ　ライク　ア　トレイン　ライド・・・か」
圭子は自分が何を望み、何を目指しているのか、自分にとって何が一番大切なのか分からなくなってきた。私はむやみやたらと走っているだけなのだろうかと、寂しい気持ちになった。

デイブのテストが行われるポートアイランドに足を運んだ。その人口島には高いビルが

整然と立ち並んでいるのだが、人の姿を見かけないせいか、何か無機質で索漠とした印象を受けた。試験会場の場所を確認し、ホテルには四時前に着いた。チェックインし、鍵を受けとって、デイブはしばらく考えてから言った。
「圭子、いっしょに部屋に来ますか」
「えっ？」
と圭子は彼の顔を見た。二人は互いの目の中に言葉を探した。
圭子の瞳が一瞬輝いたと思ったら、次の瞬間あきらめの色を帯びた。
「ゆかを迎えに行かなくちゃいけないから」
「・・・そうですか」
デイブは目を伏せた。
エレベータに乗り込む彼に手を振って圭子はホテルを後にした。これでよかったんだと自分に何度も言いきかせた。自分の中には超えることのできない川が存在することを知った。

六時半頃、保育園に行くと、一人ポツンとブロックで遊んでいたゆかが、泣きながら駆けつけてきて、圭子に飛びついた。
「遅くなってごめんね」
小さくて柔らかいわが子をギュッと抱きしめると、愛しいものを失わずによかったと心から思った。

小春日和の休日、圭子は部屋の窓を全開にして掃除機をかけた後、玄関まわりを片付けていた。ゆかもお手伝いすると言って寄ってきて、ゲタ箱の上に置いてある鍵のカゴをいじっている。家や車やバイクなどの鍵を無造作にいれたカゴなのだが、赤ちゃんの頃からのゆかのお気に入りだ。
洗濯物も干し終えて、久しぶりに三人で公園にでも行こうか思いながら、居間に入ると透とゆかはまたアニメのＤＶＤを見ている。
「それ、もう何回も見たでしょう？晴れてるから公園へ行こうよ」
「ゆかちゃん、これ大好き！これ見てたいよ」
「ＤＶＤだからいつでも見られるでしょう？また後で見ればいいじゃない」
「いやだ。今見るの」
圭子が電源を切ろうとすると、透がとめた。
「いいじゃないか。見たがってるんだから、無理やり公園に行かなくても」
ゆかは味方を得て、勢いづいて言った。
「お父さん大好き！一緒に見よう！」
圭子は二人の馴れ合いにプチンと切れた。
「こんないい天気に、子どもを外で思い切り遊ばせてやろうと思わないの？結局あなたは自分が動きたくないだけじゃない。テレビにお守りさせてばかり」
「どうして君は、ぼくが君の思い通りに動かないと切れるんだ。休日の過ごし方まで押しつけるのか。君といると息が詰まるよ」
「わたしだってあなたといると、バカになりそうだわ」

圭子は、価値観の違いだと、自分の怠惰を認めようとせず、逆に圭子を責める夫に心底うんざりした。ともに成長していけるパートナーとはどうしても思えないのだ。それに、「大好き」とう誘惑的な言葉を効果的にあやつるゆかのずるさにも嫌気がさした。わが子のためを思い、行動してきたつもりだが、自分一人が空回りしている虚しさを感じずにはいられなかった。

圭子はデイブに会いたいと思った。会ってどうなるものでもないのは分かっているが、共通の言葉を持つ彼の空間に逃げていきたかった。

大きめのバッグに着替えや化粧品を詰め込むと、自分の車の鍵を取ろうと、カゴの中をのぞいた。赤いハートのキーホルダーに付けた鍵がない。カゴの中をジャラジャラと何度もかき回しても出てこない。ジャケットやズボンのポケット、カバンの中など一時間余り部屋を探し続けたのに、見つからないので、だんだん疲れてきた。家を出ようとした時の高ぶった心も落ち着いてくると急に空腹を覚えた。

時計の針はもう一時を回っている。ゆかもおなかを空かせているんじゃないかと、ソロソロと様子を見に行ったところ、テレビを消して、透とレールを組み立てて電車を走らせていた。

「おなか空いたね。回転寿司でも食べに行こうか」と圭子が声をかけると、ゆかは、

「行く、行く！ゆかちゃん、おうどん食べたい」

と笑った。

透の車の止めてある駐車場まで三人で歩く。ゆかを真中にして、三人で手をつなぐと、ゆかは決まって二人の手にぶらさがって、大きくジャンプする。ジャンプした拍子に、ゆかのポケットからチャリンと何かが落ちた。赤いハートのついた鍵だった。

「あれっ？ゆかちゃん、持ってたの？」

「うん、ゆかちゃん、赤いハート大好き！ポケットに入れたの」

「そうなんだ」

車の鍵を拾いながら、圭子は少し笑う。きょうはゆかのおかげで川を越えずに済んだ。

透と出会った頃は、一緒にいるといやされたのに、今は互いの存在そのものがいらだたしい。ありのままのお互いを認めることができるのだろうか。この関係は修復可能なのだろうか。また、修復に値するものだろうか。答えの出ない疑問が次から次に浮かぶ。

満足気に車を運転する夫の横顔が、他人のように遠く思えた。

（了）